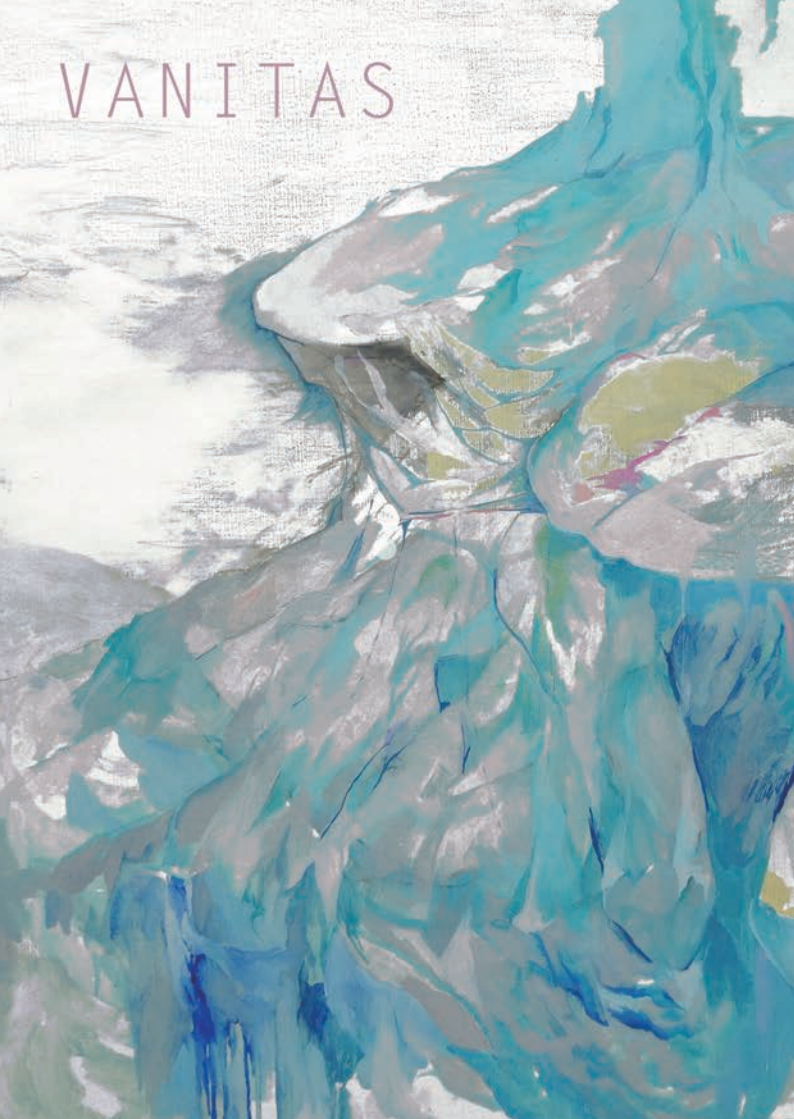


VANITAS



VANITAS



VANITAS

VANITAS

ガルシア
入江にて
空の空
ワイン

83 57 7 5

ワイン

田中バイオ

彼が小説家を志したとき、そのワインがプレゼントされた。「あなたが大成したら、このワインを開けて飲みましょう」と恋人は言った。ワインは彼の本棚の上に置かれ、彼が小説家になつていくのを見守ることとなった。

彼は文章に熱心に取り組んだ。次々と原稿ができあがり、封筒に入れられ、出版社へ送られた。出版社からの連絡がなくても、原稿を出すペースは変わらなかつた。五年が過ぎた。ワインはほこりをかぶっていた。

ワインがプレゼントされてから八年が過ぎるころ、彼は恋人と別れた。それでも彼は小説を書きつづけた。本棚の上にも本が並べられ、ワインは部屋の隅に置かれた。

彼の友人が結婚し、子供が生まれた。彼の親がこの世を去った。彼は書きつづけた。彼の小説が出版されることはなかつた。彼は文句ひとつ言わず書きつづけ、やがて死んだ。彼の半生を添い遂げたこのワインは、さぞかしおいしいことだろう。

(了)

空^{から}
の
空^{そら}

佐藤
芙有

ベートーヴェンのソナタ集に挟まれていたふるい手紙を、実家の自室で読み直すのはいかにも息苦しそうだったので、持つて出てきてしまった。

部屋の本棚に並んだ楽譜を整理して見て見つけた。グレーの封筒は記憶よりもよれよれになっていた。そのまま開かず捨ててしまいたかったのだけれど、なぜかそうできなかった。

冬の日差しが降る南柏駅のホームに、緑色のラインの電車が滑り込んでくる。一人暮らしをしている相模原のアパートに帰るために、千代田線直通の各停に乗り込んだ。実家の最寄り駅を通るこの唯一本の路線には、高校時代からずっとお世話になっている。

手紙をもらったのは、三年前だ。僕は高校二年生だった。とても遠くおもえる。季節もちょうど今頃、十二月の、二学期の終業式の日だった。

成績表を受け取り、帰りのホームルームが終わってざわめく教室で、
「ちよつといい？」

と話しかけてきたのは、学級委員の矢田さんだった。

矢田さんは物静かなひとだ。おとなしいというよりは、いつもとがらせるようにつぐんだ唇に、つんけんした感じを受けた。

目を伏せてトートバッグのなかをさぐっている。まつげが長い。バッグは、かわいいキヤラクターも個性的なイラストもプリントされていない、クリーム色の無地だった。底の部分が少し黒く汚れている。

「これ」

と突き出されたのが、そのグレーの封筒だった。中身の紙でかすかに膨らんでいる。おもて面には何も書かれていない。

「え」

矢田さんが僕にラブレター？ 全く予想外の展開だ。はつきりいつて彼女は僕のタイプではない。でも肩までの柔らかそうな髪の毛はきれいだと思う。もっとよく知ればしつくりくるところが増えていくかもしれない……。

目を泳がせる僕を冷たく一瞥して、彼女は

「違うわよ」

と言った。

ほら、と裏返した封筒に書かれた差出人の名前は、さらに意外なものだった。

青柳祐介。

中学校の文集で見たのと同じ筆跡だと思った。ひとの性格は変わっても、筆跡はあまり変わらないのだろうか、とぼんやり思う。

それじゃ、と踵を返しかける矢田さんをあわてて呼び止めた。

「なんできみが、あいつの手紙を僕にくれるの？」

「あなたに渡してほしいって頼まれたから」

青柳は同じクラスにいる。窓側の一番前の彼の席を見ると、すでに空になっていた。いそいで席を立ったのか、椅子がきちんとしまわれず、斜めに飛び出していた。

僕は矢田さんに尋ねた。

「青柳と仲がいいの？」

「仲はさほどよくないわ」

「あいつって最近元気なの？」

「元気ってどういうことかしら」

僕はめんくらった。彼女は淡々と言った。

「ひとが元気かどうかは私にはわからないわ。でも青柳君は、とくに体調は崩していないと思う

わ

「矢田サン」

まのびした声が割り込んでくる。教室の前の引き戸のところで、背の高い田部が手をあげていた。

「原サンが呼んでるよ」

田部とともに戸口に立っているのは隣のクラスの学級委員だった。

矢田さんは僕にかすかに目礼すると去っていった。

「なになに」

入れ違いに傍にやってきた田部が訊く。

「ツンツン委員長と何話してたの？」

「いや、なんか青柳からの伝言？　みたいな渡された」

「青柳？　なんで矢田サンが？」

「そこが、わからない」

「……あ、そうか」

田部は思い出したように掌を打つ。

「青柳と矢田サンって付き合ってたっけ」

「そうなの？」

一年生のとき田部は、青柳と矢田さんと同じD組だった。その田部の話によれば、青柳は少なくとも、二年生の今よりはだいぶ快活だったらしい。今の青柳は、クラスではほとんど誰とも話さない。

去年の十月、合唱祭のあとの打ち上げで、ふたりが付き合っていることが皆にばれたのだという。青柳は恥ずかしそうにしながらも笑っていたし、矢田さんも顔を真っ赤にしていたけれど、嫌そうじゃなかった。

別れたって情報ないから、まだ付き合ってると思う、と田部は言った。

今年は、スポーツ祭も合唱祭も文化祭も、青柳は打ち上げに出たりしなかったな、と思いながら、僕はつぶやいた。

「矢田さん、仲はさほどよくない、って言ってたけど」

「照れてんじゃね？」

「へー」

田部は黒縁の眼鏡を押し上げて言う。

「でも、今思えば青柳って暗いやつじゃなかったよな。今はほぼ、影うすいじゃん？」
「そうなのだ。」

「中学のころはクラスでも中心のほうだったよ」

と僕は思い出しながら言った。

「中学一緒だったのか」

「うん。じつは住んでるマンションも同じなんだ」

「マジかよ？」

田部は目を丸くする。

「おまえら、ぜんぜん他人っぽいじゃん」

「そうだねえ」

たしかに今は赤の他人だと思う。

「中三まではまあまあ仲良かった気がする」

「ケンカしたの？」

「いや……」

ケンカをしたわけではなかった。合格発表の日に、同じ高校だなど、笑い合った記憶もある。

しかし一年間違うクラスになってあまり接する機会がなくなったあと、再び同じクラスになったとき、彼を包む空気が変わっていた。もしかしたら僕を包む空気も変わっていたのかもしれない。親しく話すことはなくなっていた。たぶん、一言も交わしていない。

「仲直りの手紙かね」

「やめろ、なんかきもい」

それは本心だった。正直なところ、現在の青柳にはあまり関わりたくなかった。ただ、彼が学校の誰ともしやべっていないのではなく、矢田さんとは話す機会もあるのだと知ってすこしほつとしていた。

「開けてみたら」

と興味津々の田部を

「わるい、習い事があるんだ」

と言つてかわし、教室を後にした。

受け取つた手紙を読んだのは、学校帰り、ピアノの先生の家に向かう千代田線の中だった。先生は東高円寺にある邸宅で教えていた。レッスン室にはベーゼンドルファが二台並んでいる。国会議事堂前で丸ノ内線に乗り換えてゆく。

レポート用紙に手書きされた青柳の手紙は、

「もう何も考えられない。」

ではじまり、

「つかれた。」

で終わっていた。

きちぎちとポールペンで刻み込むように並べられた文字が、何ともいえない力を放っているように思えた。閉鎖的な地下鉄のトンネル内で、雰囲気にあてられてなんだか頭がぼうつとした。げんなりもしていた。

どう反応したらよいのか。とりあえずレッスンを終えてから考えようと思った。

閑静な住宅街のなかにある先生の家に着き、鍵の開けてある玄関ホールに入ると、激しくも滑らかな演奏が聞こえていた。ドビュッシーだろう。喜びの島。

時間になったら、前のひとがレッスンをしているも部屋に入ってよいことになっていたので、五時半になったことをたしかめ、ノックしようとする。

とたんにキャンキャン足にまとわりつくものがあり肝を冷やした。先生の愛犬のパピヨンであった。ペろペろ舐めてくる攻撃に足止めをくらう。

「ジョゼ、さわがないの」

ややあつて小柄で眼鏡をかけた先生が扉を開けて出てきた。

「尾島君、いらつしやい」

「こんにちは」

ピアノの前で楽譜をしまっているのは姉弟子の、大学生の亜美ちゃんだ。今日は襟付きの小花

柄のワンピースを着ている。まっすぐな栗色の髪が背中揺れた。

先生の家はお金持ちだし、亜美ちゃんも実家が荻窪にあるお嬢様だ。由緒ある女子大の哲学科に通っている。前の先生の紹介で、千葉県から通っている僕は、なんとなく場違いな感じはある。それでも持ち前の屈託のなさで、先生や先輩の生徒さんからかわいがられていた。

「先生、ありがとうございます」

亜美ちゃんは完璧にきれいな笑顔でほえんで挨拶をした。

「また来週ね」

先生はジョゼを抱き上げ、

「ケージに入れてくるから少し待っていてね」

と奥の住居スペースに消えていった。

ふわつと甘い香りがして気付くと亜美ちゃんがすぐ横にきていた。

「モスバーガーで待ってるからね」

と彼女はにつこり笑って言った。

亜美ちゃんはお嬢様だけけど、ジャンクフードが好きだ。そういうところがいいと思う。

その日の僕のレッスンは、バッハの平均律クラヴィーア曲集第一巻の十番、ホ短調のプレリュードとフーガ、それとベートーヴェンのピアノソナタ第十二番の第三楽章だった。ベートーヴェ

ンの方は初めて見せる曲。

僕はいつも、他に何か心配事があったり気になることがあると、より無心に曲のなかに逃避することができた。その日もそういう日だった。我ながら音の他のものが見えないほどの集中力だった。

特に平均律のフーガの、十六分音符を刻む指先の感触に陶醉した。宇宙にいくつも針を刺して星の光を通すがごとくだった。

当時の僕は「ふつう」を模索していた。

いや、ただのふつうでは駄目だったろう。ふつうのなかの「ちょっといいほう」を目指していた。だからこそ、高校二年生になったかつての友人の変化の仕方を、是とはできなかった。彼、青柳は、「ふつう」からは著しく外れていきはじめていたから。

自分についていえば、ピアノを弾く男というものが、目指す「ふつう」の範疇であるかどうかは微妙なところではあったが、意外にも僕は堅い感じのクラシック音楽が好きだったし、都内にレッスンに通うことで受ける恩恵が大きかった。東京の風、ひと、雰囲気。僕が触れられる、ほんのわずかな隙間から漂うそんな匂いを、なるたけ鼻をふくらませて味わった。

待ち合せしたモスバーガーの奥まった席で、亜美ちゃんは文庫本をめくっていた。テーブルに

は食べかけのオニオリングのバスケットがあった。

「何読んでるの」

向い側から小さな表紙をのぞきこんだ。

「九鬼周造」

彼女は言った。「いき」の構造、とある。

文庫本はフィルムでカバーごとコーティングしており、ページの上部に彼女の通う大学名が判で押されていた。

亜美ちゃんこそが、僕の「ふつう」を「ちよつといいほう」にひっぱつてくれそうな存在だった。彼女はかわいい。かしい。そして安定して「ふつう」である。

ホットコーヒーとモスチーズバーガーを買って席に戻つてくると、

「今日はどうだった？」

と彼女はたずねた。

「バツハは、うまく弾けた」

「わたしはあんまりかな」

華奢な指で、きれいな形の耳に髪をかけて言う。

「でもいいや」

ふふ、と僕たちは笑いあう。

「あさって、十一時だよね」

と僕はたしかめる。

「うん、原宿駅前ね」

亜美ちゃんはうなずいた。

あさってといえばクリスマス・イブである。先週のレッスンのあと一緒にご飯を食べたときに、彼女が、デートしよっか、と誘ってくれたのだ。

「表参道あたりおさんぽしよう」

と亜美ちゃんはにつこりする。

僕はうれしさをかくさず、にまーと笑ってうなずいた。

「かーわいい」

彼女の小さな手が頭の上にポンとのった。

僕はかわいいがられている。

「学校で何かおもしろいことはあった？」

「おもしろいつていうか……」

一瞬迷ったのだが、放課後にもらった手紙をみせることにした。

かさかさ、と封筒のなかのレポート用紙をひらく。二枚にわたって文字でぎっしり埋められていた。

少しの時間、彼女はだまって目を通していった。右の眉がすこしひそめられているようにみえた。僕はバーガーにかみついた。

やがて、

「なにこれ」

小さなため息をついて、亜美ちゃんは笑った。

「いたいわねえ」

それ以上なにも言わずに、手紙を丁寧にたたんで封筒に戻した。

当時の僕は「いたい」ことに敏感だった。すこしでも「いたい」ことが目立つのは、「ふつう」ではないと考えていた。

「いたい」は絶対の否定の言葉に思えた。

だからそのときは、亜美ちゃんが「いたい」と形容した手紙を、かなりの嫌悪と哀れみをもってみていた。それを書いた青柳のことも。

でも三年を経た今、再び手紙を開いてみると、感触が異なっている。そのころ解釈したよりも

ずっと優しいまなざしで、亜美ちゃんが手紙を読み、その言葉を発したのかもしれない、という可能性に思い至るようになった。

電車は松戸駅を通過する。

うす黄色の日差しが、窓の外を満たしている。空に雲は見当たらない。電車内はそこそこ混みあっている。僕は長椅子の端っこに座り、お尻を温める暖房を感じながら、銀のパイプに寄りかかる。

そうして読み直した青柳の手紙は、こんなふうだった。

○

もう何も考えられない。

蛇のようにくねる道路の上に、赤や橙の光が連なって流れていく。それら一つ一つの内部に、この体とほぼ同じ大きさの体が数体ずつ収まっていると、頭ではわかっていても実感はできない。それほど小さな、宝石の粒のような車が連なる。

知っていても実感できないことばかりである。

体で実感する事柄だけを、「本当のこと」だと信じて奮闘してきた。

この世に生きていると、「嘘をついてはいけない」と誰からともなく諭されるのはなぜだろう。ときどぎ裏をかくように「嘘をつかなければいけない」とされる場合には、必ず条件がついている。例えば「うまく世を渡っていくためには」、それから「(何かいい物を) つくるためには」、「よい人間関係を築くためには」。そういうことのために「あえて」嘘をつけ、というのだ。つまり嘘をつかない方が全うなのが前提である。

しかもそれらの嘘は、つくことによつて、何か別のものを守ろうとしている。例えば「自分」を壊さないこと、「美しいもの」をつくること、「他人」を取り返しのつかないほど傷つけないこと。そのとき嘘に守られるものは、優先順位の低い周辺の事柄に嘘をついて剥がれていったあとに残る、より純度が高く大切な核心。その人にとつての「真実」と言えるのではないか。

どつちみち「本当のこと」を優先しろと言われている気がする。

そのことに反発したのではない。僕も心からそう信じている。「本当のこと」、それも自分にとつて最も本当味のある本当のことを、守りたいと思つてきた。「自分にとつて」本当のことは、「他の人にとつて」ではあり得ないから、これはもう僕のすべきことだと思つた。それに従うのが

僕、ひいてはその「本当」を感じるそれぞれの人に課された仕事のようなものだ。

それを信じれば、他のどんな人の思いに沿わなくても、まあどこかにいるかもしれない「神様」のような存在だけは、僕に微笑んでくれるのではないかと思った。僕が世界を感じるやり方は、僕が自分で決めたわけでも、親や教師に与えられたものでもない。

生れ落ちてたくさんの時間を過ごし、体を通り過ぎていった膨大な量の些細な経験の中で、なぜか僕に引つかかって星座のようにつながって意味を持つてこの頭の中に残っているものたちがある。そのつながりはさしずめ僕の歴史といった表情でこの頭の中にある。僕は自分で考えて、その自分を説明する物語を所有していると思いきや、僕の意識に残る経験を拾い上げる規準が、どういうものなのか自分ではわからない。なぜかいつのまにか僕の体内に形成されているザルが、その目を通して多くの事柄を忘れ去り、たまたまのように引つかかって残った記憶が、さも重大な意味があるかのように残っている。そのザルは、僕が自力でつくったものとは決して言えない。そういうザルをつくったものを便宜的に「神様」と考えている。かみさまと言っても、例えば一人の人型をした存在が、皆のザルをつくれるとは思わない。というか皆のザルは呼応し合っていて、一人一人の中に独立してあるとは言えない。人間という生き物は、数はたくさんいるけれど、その一人一人が持つザルの共鳴し具合つながり具合から見ても、全員で一つの生き物のようだ。その関係し合い様の大きさや深さは（さらに人間以外との関係まで考えたっていいのだけ

ど)僕にはもう考えも及ばない。それだけの大きさを感じるものなら、もうそれが「神様」でもいい。というかそういう大きさを感ずることが僕に必要なだけで、神様でなくてもいいのだ。

そういつた大きなものから、この小さな体が、ここにあることを承認されるためには、その大きなものが僕の体内に形成したザルが指し示す、「本当のこと」に忠実になればいいと考えていたのだ。(承認されたいという考えや、その方法を、与えられた役割に奉仕することに求める発想も、僕のザルが導き出したものだ。)

でも今、僕の体はこんなところに立っている。頭では、信じる、と、どんなに誰にも認められなくても腐らず悲しまず僕の本当に仕えるのだと、思う。そう思っていれば平気なはずなのに、心底疲れ切った声が聞こえる。それは僕の胸郭を震わせ、隙間風のように掠れて喉を抜ける。「神様」に課された「本当」が示すのが、ここだとしたら、それに殺される。

否、僕にこのまま、それに従う力が無いというだけのことなのだろう。もつと強ければ、壊れずに「本当」に奉仕できるはずだ。

小さな車のライトの連なる流れに、このまま手を伸ばせば掴めるかもしれない。あの美しい流れを輪にして首飾りにして、お守りにしたなら、また一人で新鮮な気持ちで「本当」に奉仕できるかもしれない。しかし掴む前に体はぐちゃぐちゃだろう。既に落ちていよう。

この体がなくなつたら、僕の本当もなくなる。僕の本当は、「この体が本当だと感じることを理解してその通りに振る舞うことだからだ。」

「本当」を課された一つの体を手放したい。空に溶かしてしまいたい。「神様」の示す流れは読めるけれど、それに従うように体を動かすにはもう力が出ない。動かすやり方をもう考えられない。つかれた。



その夜、東高円寺からの帰りの電車のなかで、僕は青柳にメールを打った。

亜美ちゃんに見せた後だったので、外の空気が吹き込まれたように、気持ちに余裕ができていた。そうでなければ、彼に連絡など取ろうとしなかつたらう。

「大丈夫か？」

それだけ送った。

南柏駅からバスで十分の七階建てのマンションに、僕の家はある。五歳の時に、家族三人で都

内のアパートから引越して来た。六階の真ん中あたりの部屋である。

それから、青柳の家もある。うちも青柳のところも、新築のころに入居した世帯だ。青柳とは、新一年生になるとき、同じ小学校に通う同級生として友達になった。マンション内の他の同級、同学年の子どもは女の子ばかりだったので、自然に一番親しくなった。連れ立って学校に通ったりしていた。

青柳の家は五階の角部屋だった。彼の家には、北側に、他の家にはない大きなバルコニーがついていた。彼の家の下に、四階までは北隣にもう一つ家があるのだが、五階より上にはなかった。隣の家がない代わりに広いバルコニーがついていたのだ。個人宅が所有する屋上のような空間だった。

そこには竿を二本渡した物干し台があり、いつも、ハンガーのフックを洗濯ばさみで挟んで飛ばないようにした洗濯物が揺れていた。

そのバルコニーに何度か遊びに行った記憶がある。

中学二年生か三年生のころだったと思う。

中央に、木の丸いテーブルが置かれていた。その両脇に、海水浴場で日焼けするためにつかつたらよさそうな、寝そべることのできる椅子があった。丈夫な荷造りテープのようなもので編まれた座面は、一つが白と水色、もう一つが白とレモン色の組み合わせでできていた。

青柳は水色の椅子に、僕はレモン色の椅子に寝そべって、雲ひとつない空を見上げていた。

「まぶしいな」

青柳は言った。

「お日さまのところだけ手で隠せばましになるよ」

そう僕は教えたが、彼は手をあげることはせず

「視界の端っこにお日さまを入れたまま、がまんして空をみてるよ、涙がでてくる」

と言う。

そんなに無理しなくてもいいのに、と思うが、

「涙の膜がにじむと、空が二重になったみたいでいいよ」

と、時折目をしばたかせながら飽きずにながめている。

高校に入ってから、僕はソフトコンタクトレンズに変えたのだが、そのころは眼鏡を常用していた。

室内で、眼鏡だけに光が当たるような、何かの条件を満たすとき、レンズに涙のとりみらしき流動が映りこむことに気づいていた。瞬きに応じて、すこし気泡を含んだ薄い液体が動くので、たぶん眼球をおおう涙なのだろうと思っている。

青柳の話をきいて、その個人的な発見の話をしたかったのだが、どう言ってもいかわからずに

そのままになった。

「晴れてても空つて不透明にみえない？」

と彼は問う。

「不透明？」

「ポスターカラーで塗りつぶしたほうが、透明水彩の絵の具より空っぽくなりそうってこと」

「うーん、透明なはずなのにね？」

「宇宙まで透けている」

「どこからが宇宙？」

「わからない」

「どこまでが空さ？」

「わからない」

覚えているのは、お互いに相手の姿を視界に入れずに空を眺めていたという雰囲気だ。

冬の午後で、僕は膝まである紺色のダッフルコートに、青柳はたしか茶色のダウンにくるまつて、寒風に吹かれていたことと思う。

ただうすい黄色の日差しはちょうどよく暖かかった。

「空を眺めていると、ちりちり銀色の細かい虫みたいなのが見えない？」

と彼はまた訊いた。

「うん。でも虫は嫌だな、これたぶん僕らの目玉の血管でしょう？」

「そうなのかな？」

「血管を通る血液の流れが見えるんだと、思ってたけどね」

「気持ちわる……空ってまっさらじゃないね」

「ゆらゆらしている」

「何か見える」

「何に見える？」

「天使さまの羽根だね！」

それには応えずに、僕は口をつぐんだ。そういう発想はあまり好きではなかった。

「虫とか鳥とか飛行機とか、そういう形のある羽根じゃ限られた場所しか飛べないでしょ」

彼はひとりで話す。

「天使ならもつと空全体に広がるでしょ、それにここまでが羽根でここから羽根じゃない、つてのは、無いと思うね」

マンションの周囲はうるさかった。交通量の多い道路をはさんで向い側にスーパーマーケットがあったり、住宅地があったりし、電線もたくさん走っている。また上を向くとマンションの上

階が部分的に目に入ってくる。僕はひとりで、そういうものをなるべく視界の外に押しやって、空だけに集中するという遊びをしていた。

僕のそういう集中力は、ピアノを弾くときにも生きる。

選んだものに身を沈めることによつて、まっとうに逃避するという技である。

「とべたらいいのにな」

そう言つて、青柳が立ち上がる気配がする。

身を起こして目で追うと、彼はバルコニーの端の、胸くらいの高さの柵に両手をついて、伸び上がるように空を見上げていた。

「とぶ、というか、溶けてもいいね」

「とける？」

「空にじんでとけちゃうのさ」

そんなこと、僕ならできている、と思った。見ている空以外、なくしてしまえばいい。空を見ている自分の体さえ、視界の外に押し出してしまつて。

でも教えてあげなかつた。

冬休み初日の明け方、まだ暗い自室で目をさましたとき、直前までの浅い眠りのなかで、その

ころの夢を見ていたことに気付いた。青柳と仲がよかつたころのこと。

机の上に置いてあるグレーの封筒が、ずつと静まっていた記憶の湖面に、石を投げ込んだのだらう。夢の底から浮き上がってきた記憶は、とてもふわふわしていた。どこまでが正確な記憶かわからなかった。

夢は、楽しくもないし、どちらかといえば殺伐としていた。けれど居心地悪さも含んでもう少し味わいたくて、再び浅い眠りへと戻った。

改めて目覚めると九時半で、久しぶりに寝坊をした。

枕元の携帯を確かめたが、メールは来ていなかった。

リビングに行くと、母が電話中だった。口調から察するに、マンション内の主婦友達とのおしゃべりであるようだ。

台所に入って換気扇をまわし、やかんを火にかける。

コンロの脇には、ベランダに出るガラス張りの扉があり、我が家の洗濯物が揺れているが見える。その先に、背の低い住宅街を見下ろせる。いくつもの屋根の上に、今日も澄んだ日差しがそそいでいる。

「あそこのご夫婦ねえ……そう五階の」

漏斗とろ紙をコーヒーマーサーバーにセットする。ろ紙のつなぎ目は、紙を開く前に折りこんでおく。粉を一杯半入れる。

「そう、旦那さんのお仕事がだめに……お気の毒ねえ……」

しゅんしゅん、湯が沸いたら換気扇を消し、やかんの取っ手にぬれふきんをかぶせて持ち上げる。粉の上に少量そそぎ、少し時間をおく。

これは以前にテレビで、ドリップでコーヒーを入れるときに、こうして豆をふくらませるとよいというのを見たからだ。テレビでは、お湯を垂らすとスポンジケーキみたいになふかっと豆がふくらんだ。しかしそれは挽きたての豆の粉を使う場合の話で、あらかじめ挽いてある市販のものを使う家では、少しもふくらまないのだった。

「ああ、そうそう……すれちがっても挨拶もなしよね……昔はうちの遊びにいったりしていたけど」

台所とリビングの間の壁を隔てているが、また母もあまり大きな声を出さないように気をつけているようだが、電話にむかつて話す言葉は聞こえてきた。

頭の中でバツハの平均律が鳴りはじめた。

部屋が集まった家というのは奇妙な場所だ。その家が集まりあつたマンションというののもつと奇妙な場所だと思う。

ミルクをふたつ入れたマグカップを部屋に持ち込み、アップライトピアノの蓋を開けた。サイレント機能がついていて、三本あるペダルのうち真ん中のものを踏みながら左にスライドさせて固定すると、鍵盤を押しても音が出なくなる。高音部の鍵盤の下にある小さな装置にヘッドフォンのプラグを差し込み、スイッチを入れる。

黒くふかふかのクッションで両耳をやわらかく塞ぎ、とろんと優しい密室のなかで、指が音を刻みはじめる。

電話を終えた母が、用意しようかときいてくれた昼食をパスし、弾きつづけるのによやく飽き足りたところには午後三時をまわっていた。集合住宅の不文律のようなものがあるとはいえ、朝の十時を過ぎればピアノの音を出してもよかつたのだが、その日はずっとサイレントで弾いていた。気分的なものだ。

さすがにお腹がへつたので、近くのコンビニに行くことにした。

冬の外はもう日が傾きはじめて橙色を帯びていた。

マンションには二本の階段と一つのエレベーターがある。エレベーターの近くにある方の階段を下りていくと、五階の角部屋のバルコニーが見えた。

ずいぶん久しぶりにそのスペースを見たような気がした。いや、毎日のように階段を利用するのだから、目に映っていないはずはなかつたのだ。だが、そこをそことして認識したのは、もの

すぐく久しぶりであった。ひとは自分勝手に世界を見ている。すくなくとも高校生になってから、そのバルコニーを見たことはないように思った。

遊びに行つたころの記憶では、そこはすつきりと片付いていて、住む者の営みを感じる洗濯物はためていた。しかし今では全く様変わりしていた。まるで物置のようだった。

丸テーブルはひっくり返され、重ねた二脚の長椅子とともに隅におしやられて汚れていた。裸の物干し竿は、二本のうち一本が、片端を地面に落として斜めになっていた。そのほか、壊れたのだろうか、トースターや電子レンジや炊飯器が転がしてあるのが見えた。

「もう何も考えられない。」ではじまり「つかれた。」で終わるその手紙は、まるで遺書のようにだとはすぐに思った。

青柳ハ死ヌツモリナノカ？ 思つてはみたが、我ながら実の伴つていない思考だった。頭の中にワープロ文字で浮かべただけのような考えだ。

つまり、僕はその手紙を受けて、もつと焦つたり、何とかして連絡を取ろうと必死になつたりしたほうがよいのか否か、と考えていたわけだ。しかし考えているということは、体が動かない状況に対して理由をつけようとしているだけである。結局僕は何もしなかつた。

封筒の裏に差出人の名前はあつたが、表に宛名はなかつた。矢田さんが嘘をつくとは思えない

が、明確に僕あてのメッセージだとも断言できないのだ。早急に、僕が動くような筋合いではないように思えた。

「なに考えてるの？」

隣で、オフホワイトのファー付きコートを着た亜美ちゃんが尋ねる。コートの下から少し出たミニスカート、その下の、キャラメル色をしたニーハイブーツ。安定して完璧である。

「なんにも」

僕はにつこりした。

クリスマス・イブの表参道はひとでごった返していた。

街路樹には、今は昼間だが、夜にはきらびやかに灯るだろう電飾がはりめぐらされていた。いたるところにクリスマスツリー。白や金や、さすがにオシャレ感のある装飾である。

ゆらんゆらん歩いた。彼女の小さな体をさりげなくひきよせて庇いながら、ひとの波にたゆたうことは楽しかった。

表参道ヒルズやラフォーレを見た。ひとで満ちていた。

ワタリウム美術館まで歩き、写真展を見てきた。また表参道方面まで戻ってくる。亜美ちゃんは竹下通りを歩きたいと言った。

「いこここ、ここはいろ」

立ち止まった彼女は上を見上げ、いたずらっぽい様子で一つの店を指差す。外の階段をのぼった二階にある店に入ると、びっくりした。いわゆるゴシッククロリータ・ファッションのブティックだったからだ。

ふんだんなフリルで重そうな、ワンピースがたくさん陳列されていた。

「いらつしやいませ」

豪華な巻き髪のウィッグにヘッドドレス、詰め物でふくらんだ甘い花柄のスカート、厚底の白い編み上げブーツ、という出で立ちの店員が言った。

店内には、全身のコーディネートをかつちり決めているスタッフのほかに、好きなアイテムを部分的に取り入れて着ているような客が数人いた。

「よくくるの？ こういうところ」

と、思わずキョロキョロしてしまいがちながら僕は尋ねる。

うふふ、と彼女は笑って、

「わたし、高校生のときはいつも、あの店員さんみたいな格好をしてたのよ」と言った。

意外だった。

店内を見まわす視界の端をかすめて、驚いて二度見したものがあつた。

左右一組になつて、縦に何組か並べられた、鳥の羽根である。まるで壁から羽根が生えているように見える。

僕の視線をたどつて、

「あれは天使の羽根」

と亜美ちゃんが言った。

「ゴムベルトがついていて、背中にしよえるのよ」

白やグレーや茶、それに黒の、羽毛らしきものが固められた作りもの。壁にかけて展示しているのだ。

なつかしい、とつぶやいたりしながら、にこにこした亜美ちゃんが店内を見ている間、僕はなんとなく羽根から目が離せずにした。怪訝に思っていたわけではなくて、悪くないものに思えた。ずっと羽根を眺めている僕に気付いて、亜美ちゃんは可笑しそうに言った。

「クリスマスプレゼントに買ってあげようか？ CDのお札に」

この日僕はすでに、亜美ちゃんへのプレゼントに、あらかじめリクエストをきいたCDをあげていた。グレン・グールド演奏の、バッハのフランス組曲（輸入版）と、スパングルコールリリラインの二〇〇五年発売のミニ・アルバム。

「いい、いい。パスタごちそうしてもらつたし」

僕は笑って胸の前で両手を振る。

亜美ちゃんも僕に事前に希望を訊いてくれたが、欲しい物も思いつかないので、じゃあお昼をごちそうして、と頼んだ。彼女は裏通りにある小さなパスタ屋さんを予約してくれていて、さっきおいしいペスカトーレを食べてきたのだ。

「さすがにおれ、しよえないしね」

笑いながら言う。

「でもいいよね、天使って」

僕は思っていたことを言った。

「手足も使える上に、空を飛べて得だし」

「飛びたいの？」

と、彼女は訊いた。

「……」

僕はこたえあぐねた。とべたらいいのに、と言っていたやつはいた。

亜美ちゃんはやさしく笑って、僕の手を引いて導き、

「じゃあ」

アクセサリーが入ったガラスケースの上を指差した。ガラスの天板の上に小さな籠があり、そ

の中にはガラス細工の天使の人形がいくつも入っていた。

「これはどう？ お守りになるよ」

小さな羽根をつけた円錐台形の胴体に、丸い頭部がのり、その上に黄色い輪っかがくつついて
いる、全長五センチに満たないくらいの人形だった。パステル調の色合いで、胴体には緑日の水
ヨーヨーみたいな、ぐるぐると細い模様が巻かれていた。目は黒、口は赤の、点である。三百円。
思わずふふふ、と笑った。

「今日、お昼つきあってくれたお礼、気持ちだよ」

小さな紙袋に入れてもらった天使が、亜美ちゃんの手から僕の掌にのせられたとき、うれしか
った。

五時半に、原宿駅の前で別れた。何となくだけけれど、亜美ちゃんにはその後、別の約束がある
ように感じた。恋人なんかと会うのだろうかと思っただけ。

不思議な気持ちで帰途についた。亜美ちゃんの意外な過去が垣間見られたからかもしれないし、
手の中の小さな天使のせいかもしれない。ゴスロリは僕のなかでは「ふつう」とは言いがたかつ
た。でも、いま限りなく「ふつう」を体現している彼女の土台に、そういう要素が根付いている
ということなのだろうか。それとも今でも、混在しているのだろうか。

帰りの地下鉄のなかで包装紙をむき、手のなかでもてあそんでいた人形は、すっかりぬくまっていた。ガラス製の天使は、円錐台の簡略化された胴体を僕の掌に押し付けている。爪で軽く叩くとチンチンと音がした。

バスから降りて、マンションまでの坂道をゆつくりのぼる。

十二月はまだそれほど寒くなく、ちょうどいい季候だと思う。空には半分より太った月があった。ホワイトクリスマスなんて、生まれてから一度も経験していない。

暖かいオレンジ色の照明を漏らす、マンションのエントランスホールに入っていくと、各家の郵便受けが集まって並んでいるスペースから、ふいとひとが飛び出してきた。

突然のことにすこし驚いたが、住人だろうと軽く挨拶を口にしかけて

「あれっ」

さらに驚いた。

「矢田さん？」

「尾島君……」

我がクラスの委員長は、いつものように浮ついたところのない服装、紺色のコートに黒っぽいズボンを履いていた。深い赤のニット帽をかぶっている。

すこしおどおどと視線を泳がせながら、彼女は浅く頭を下げて立ち去ろうとする。

僕はとつさに呼び止めた。

「ねえ」

後ろ姿をみせたままびくりと止まる。

「青柳んところ来たの？」

すこしの間のあと、こちらを見ないまま彼女はうなずいた。

「会えた？ 話した？」

僕がすこし焦ったように尋ねると、彼女はふつと息を吐いてからくるとこちらを振り向き、

「いいえ。お留守だったみたいよ」

いつもの冷静な口調を取り戻して言った。

「それじゃあね」

再び向けられた背中が、なんだかとても寂しそうに見えたので

「矢田さん、手、だして」

訝しげに差し出された掌に、自分が持っていた天使の人形を握らせてしまった。

「メリークリスマス」

どうしてそんなふうにしてしまったのか、今でもよくわからないのだが、不思議と後悔や後ろめたさはない。

あの天使を僕が持つていても、その後どうすることもできなかつたろう。亜美ちゃんくれたという経験は僕のものだ。形は手元になくなつても経験はずつと僕のものだ。それで形を持つた天使が、今度は矢田さんの手に触れて、すこしでも温かい気持ちを呼び寄せてくれれば、二重のラッキーだ。

そういうのが僕の感じ方なのだけれど、あまり胸を張れたものではないのだろうか？

矢田さんは、ありがと……と言った。ぽかんとした様子で、天使をながめていた。

「送つていこうか？」

ときくと、彼女ははつとして、腕時計を見てブンブン首を横に振った。

「もうバスが来るから」

と急ぎ足で出ていった。

あのときの天使はどうなつただろう。彼女の机の奥にでもしまわれて、小さな幸福をさりげなく呼んでいろうちに、いつのまにか引越しまかになんかに紛れて、なくなつていたらいいんじゃないか。

残りの冬休みはこれと違って何もなく過ぎた。寝坊してピアノを弾いていれば、あつという間だ。一月七日から、三学期がはじまつた。

南柏駅までバスに揺られながら、青柳のことを考えた。同じクラスなのだから、当然顔を合わ

せるだろう。そうしたら、声をかけてみようと思った。考えてみれば、何かを毛嫌いするのは裏返ったコンプレックスをむき出しにしているようなものだ。そういうのは「いたい」。それに案外話してみれば昔みたいに違和感なんてないかもしれない。

同時に、絶対ありえないと思いつつも、ありえないともいいきれないイメージが僕の中に育っていた。

——学校に着いたら、救急車やらパトカーやらが何台か集まっていて、構内の一角が黄色のテープで立ち入り禁止になっている。

「飛び降りだつて？」

「まじ？」

「うちの生徒？」

登校する生徒たちが現場の近くで歩く速度をゆるめて溜まっていきそうになる。そこを先生や警察のひとが制して、教室で待機するようにと促す……。

うちの学校で飛び降りるとしたらどこからだろう？ 一般教室のあるA棟はあまり適していない。そうだ。下に弓道場やごみ置き場があるし。専門教室のあるB棟の、外についた階段の一番上あたりがよいのではないか。下にはプレハブ小屋の部室棟が並んでいるが、そこを外すように狙えば日の当たらないコンクリートの地面にぶつかれるだろう。

柏駅で電車から降りて、他の学生に混じって歩く道のり、ひそかにどきどきしていた。学校では騒ぎになっているんじゃないかって。あいつがやりそうな方法は飛び降りくらいしか想像できなかった。飛び降り以外の方法でならば、そもそもやらない気がした。

しかし、学校に着いても、何の騒ぎも起きていなかった。救急車もパトカーもない。その代わりに、青柳は学校を休んだ。

出席をとるとき、担任が

「青柳ー、は、風邪と」

とつぶやいていた。

つつがなく三学期がスタートしていったが、一週間経っても二週間経っても、青柳は学校に顔を出さなかった。担任はすぐに、何も言わずに出席簿に青柳の欠席をつけるようになった。

一月も後半になると冬本番、寒い。冬は不思議な気持ちにさせられる。

たぶん皮膚が硬くなっているからだろうか、思考や行動があまり表立った動きをしなくなる。しかし、春を待つ冬芽のように、冬眠する変温動物のように、かっちり固めた外皮のなかはやわらかく、弱い。

春や夏に、外気温に開かれるようになる体と、真冬にコートを着てまで守りに入る体とは、

考えることも違ってくるだろう。夏には馬鹿らしくて考えられないようなことも、冬には真顔で考える。デリケートだ。

徹底して内にこもる温もりを楽しめていればよいのだが、どこまでも澄んだ気持ちで、殺伐とした思考を育ててしまおうとしたら、すこしおそろしくもなる。

あるどんよりと曇った、鈍色の空の放課後だった。

学校の前を通る国道を、地下道で向こう側に渡ってから、駅方面に歩いていたときのことだ。少数精鋭の進学塾の入ったビルの前で、矢田さんを見つけた。彼女は県内有数の難関校と言われる僕の高校の中でも、かなり優秀な生徒である。

「矢田さん」

心なしか、いつものきびきびした印象がないように感じられる彼女に呼びかけた。彼女が僕を見上げる。すこし呆けたような表情で、力のない透明な瞳をしていた。

「あゝ」

僕は気になっていることを口にする。

「最近……青柳は元気なのか」

「……私には」

矢田さんは下を向いた。僕も彼女のスニーカーのつま先を眺めた。

「私にはもう、彼が元気かどうかはもちろん、体調を崩しているのか否かさえ、わからないわ」
舟の上で、遠ざかっていく陸について話すような口ぶりだった。

「もうずっと会っていないもの」

「いつから？」

「二学期の終わりから」

おそらく僕に渡した手紙を頼まれたとき以来、彼に会っていないのだろう。

「おれ……おれから、電話してみるよ！」

思わず力を入れてそう言ったが、矢田さんはどちらでもいい、といった感じであいまいに笑ってうなずくと、塾のビルへと入っていった。

道ばたや駅のコンコースに立って電話をする、というのは落ち着かない。できればイスに座りたいと思った。かといって喫茶店やファストフードの店内もよくない。そして絶対に、家ではない場所から電話をしたかった。彼に呼びかけるなら、ぜひともうちのマンションがある町から離れたところからにしたいと思った。関係のない人々の雑音を間にはさんで、自分自身や相手の気持ちに対して距離を置きたい。そういつた感覚は、理屈ではなく体が選びとろうとするものだろう。そうして腰を下ろしたのは、柏駅のホームのベンチだった。通学に使っている千代田線直通、常磐緩行線のホームだ。上り方向の先頭近く、エスカレーターの裏側に、いつも空いているプラ

スチックのベンチがあつた。携帯を取りだす。

何を言おうかと考えながら、二本の電車を見送つた。このホームには各駅停車しか止まらないので、電車をやり過ぎすひとは例外である。何本見送つても、いい文句は浮びそうになかつた。

ええい、ままよ、と三本目が走り去つたところで電話をかけてみる。

「……」

出たと思つたら留守番電話だつた。ピーと鳴つた後に

「……青柳？ お、尾島だけど……手紙？ くれてありがとう……つと、また、話しましょう」
かくかくしながらも一応メッセージを入れておいた。

通話を切ると、ふうう、と大きな溜息がでた。

その頃には、マンションに帰り着くと、必ず青柳の家のバルコニーを見上げるようになっていた。そこは、本格的な冬を迎えていよいよ寒々しい場所だつた。

いつそ玄関まで訪ねてインターホンを押してみようかとも思つたが、正直に言うと、それは怖かつた。

留守電も入れたし、またすこし様子を見てみよう、と内心で言い訳をした。

なぜ怖かつたのだろう。たぶん、雰囲気だつた。外にむき出しの荒れたバルコニーや、いつも閉ざされている北側の暗い窓——そこは記憶が正しければ、青柳に与えられていた子ども部屋だ

った——が、分厚いバリケードのように見えた。

同じマンションに住んでいるというのに、同じクラスなのに、中学まではかなり親しく話していたはずなのに、いま彼との間にある壁は厚かった。

青柳からの音沙汰はないまま、二月も半ばに差しかかった。

バツハの平均律は順調に新しい曲に進めていたが、僕のベートーヴェンはなかなか上達しなかった。ソナタ第十二番の第三楽章は葬送行進曲である。

「送り出すイメージを描いて、そうね、悲しみをたたえながらも淡々と」

先生は言う。

僕はなんだかいつも肩に力が入ってしまって、全く余裕がなくなってしまう。特にその日は絶不調だった。僕の前の時間枠で、いつもは僕が来るまでレッスンをしている亜美ちゃんの姿も見えなかった。

どつとくたびれたようになりながら帰宅した。

「おかえり」

午後九時をまわった我が家のリビングは、二つある蛍光灯のうち一つしかついておらず、暗かった。パジャマ姿でテーブルにつき、本を読んでいた母の顔に、はっきりした陰影ができていた。

「どうだった」

「うん……」

生返事をする。

「ピアノ、いつまでやる？」

母は訊いた。もうすぐ三年生だ。受験勉強を考えれば習い事ばかりもしていられまい。

「うん……考える」

ただ、今は無理、考えられない、と思いながら生返事を重ねた。

母が僕の分のご飯を用意してくれている間に、玄関が開く音がして父が帰宅した。

父は台所で煙草を吸いながら晩酌をする。母はその話し相手をする。父が仕事の話をしたり、

母がご近所の話題を提供したりする。

「派手にやっているらしいわ」

台所とリビングの間の壁を隔てて、僕は話し声を聞いている。

「青柳さんの？」

「そう、奥さんのヒステリーがすごいって。同じ階の前川さんが言ってた」

「筒抜けか。隣のひとなんかはたまらないだろうな」

何かを考える余裕もない上に、聞こえるものを受け流すエナジーも発揮できなかった。耳に入

つてくるもの全部を聞いてしまう。

早々に夕飯の肉豆腐を片付け、おやすみを言つて部屋に戻る。

玄関のすぐ近くに僕の部屋はある。冷たい空気が吸いたくて、コートを羽織り、サンダルを突っかけて外に出た。

出でずぐのところは、横一列に並ぶ各家の共有廊下であるため、ぼんやりと油を売るのには適さない。エレベーター前の階段の、踊り場あたりに行こうと思つた。

曇つていて星は見えなかつた。闇に白い息が立つ。

踊り場にやつてくると、近ごろの習慣で青柳の家のバルコニーを見る。マンションの各階の共有廊下に灯つている明かりに対して、青柳の家は明かりもなく暗く見えた。

しばらくぼんやりそこに目をやっていると、もぞもぞ動きながら誰かが出て来たように見えた。驚いて目をこすり、もう一度よく見る。たしかに人影である。暗くて顔や服装は見えない。

その人物は、辺りに転がるごみ類をまたぎながらバルコニーの端まで移動し、みぞおちくらいの高さの柵にもたれかかった。次に、ポケットを探り、何かを取り出した。片手の中で弄つているものは、ぼんやり発光しているように見えた。やがて持ち上げて耳にあてた。携帯か。

ブーツ。

一瞬の間の後に、僕の尻に振動が走つた。僕は滑稽なほど体をはねさせてしまった。心臓が絞

めつけられた。

ブーツ。ブーツ。

僕の携帯が着信を知らせているのだ。震える指で、急いで取り出そうと尻ポケットを探るが、焦りすぎて取り落としてしまった。

しゃがんで拾い、通話ボタンを押す。

「もしもし！」

「……」

つながった電話の向こうは沈黙だ。

いそいで立ち上がり、バルコニーに目を戻すと、人影は柵に密着しているように見える。……いや、変だ。あれは柵の外側に立って、背中で柵に寄りかかっている。

「おいっ……青柳!？」

僕は送話口を通さずに叫んだ。

人影は気付いたように、こちらに顔を向けた。耳元に添えられていた携帯電話からの明かりが、ぼんやりと顔を照らしていた。

やわらかくほほえんでいた、気がする。

その直後、人影は虚空に向かって足を踏み出した。冷たい夜の闇に。ためらいは一切見られな

かった。

僕はぎゅうつと目をつぶった。

ピーポーピーポー。

「！」

けたたましい救急車のサイレンで急に覚醒した。

カーテンがすこし開いた僕の部屋は、ぼんやり明るくなっている。朝のようだ？ 横たわっていた布団から跳ね起きた。

裸足で外に踊り出る。共通廊下の柵を掴み、首を斜めにねじって身を乗り出すようにして、青柳家のバルコニーの下を見下ろした。

今度こそリアルに、飛び散った血痕や、その周りにいままさに張り巡らされようとする立ち入り禁止のテープや、野次馬や警察や救急隊員を目の当たりにすることを、覚悟していた。

……ピーポーパーポーピーポー。

けれども救急車のサイレンはどこかに遠ざかっていった。

見下ろす地上には、いつもとすこしも変わらない駐車場が横たわっていた。しんとしている。五階のバルコニーにも何ら気配はなく、ごみの上に冬の朝日がしずかに降っている。

人影ひとつない、新しい朝のはじまりだった。

その朝のホームルームで担任は、青柳は転校することになったと言った。

彼がずっと休んでいて、そのまま一度もクラスに顔を出さずに姿を消すことについては、何の説明もなかった。

諸連絡の時間になって、矢田さんがすつと静かに手を挙げた。僕はすこしどきつとした。

「昨日の委員長会議で決まったことですが」

彼女は平然としていた。

「卒業式の飾り付けのために、花をつくることになりました。薄紙を配るので、ひとりひとつ今日中につくってください」

前に出て各列に白い薄紙の束を配る。五枚ずつとって後ろにまわす。簡単につくりかたを説明した矢田さんは、

「つくり終えたらこの箱の中に入れておいてください」

と言つてダンボール箱を、窓際の一番前の席の上に置いた。ずっと空いていた、青柳のものだった席である。

祝い事といえば紅白だが、おそらくクラスごとの分担なのか、うちのクラスで配られた紙は白だけだった。

「はいはい」と

と言つて、僕の前の席の田部はその場ですぐにつくりはじめ。折りも適當、開くのも適當で、いびつな花だった。彼は一番乗りでその箱に花を投げ込んだ。

その日、時間が経つにつれ、少しずつダンボールは満たされていった。ふわり、ふわり、クラスメートが出来上がった白い花を投げ入れていく。

僕はなぜだか自分の紙に手をつけず、じりじりとねばっていた。

「まだ花を入れていないひとは、つくつて入れて帰ってください」

帰りのホームルームで再び手を挙げた矢田さんの連絡をうけて、僕はようやく五枚重ねた薄紙をじゃばらに折りはじめる。

ふわり。

こぼれ落ちんばかりに箱に盛り上がった白い花の上に、ひとつ、落としたところで、僕の胸にもすこしだけ息がおつた。

——地面に落ちなかつたということは、飛んでいったのだ。形のない、見えない羽根をいっばいに広げて。あいつは、あいつに課された苦しみを、空に溶かしてやったんだ。

あれから三年経つて、僕は大学生になった。

青柳とは、彼が転校して以来、一切の関わりがなくなった。矢田さんと言葉を交わす機会もなくなった。わりと仲のよかった田部とも、卒業と共に疎遠になった。

亜美ちゃんに、あのクリスマス・イブ以来会うこともない。レッスンで顔を合わせなくなった時期、彼女は大学の長い休みを利用して、海外にホームステイに行っていたらしい。帰ってくる前に、僕は三月の中旬でピアノのレッスンをやめたので、それきりになった。

ベートーヴェンの「葬送」を、結局うまく弾けずに終わった。一応最後に丸をもらったが、先生のおまけだった。

ヘンレ社原典版のブルグレイの分厚い楽譜に、そのとき僕は、青柳の手紙を挟んでしまい込んだのだ。まるで封印するかのよう。

マンションの五階の青柳の家は、バルコニーの荷物も撤去され、程なくして中古物件として売りに出された。しばらくの間モデルルームになっていたが、今は知らないひとが入っている。

僕の家は、ローンを返し終えるまであと何年、そんな話を母がしていた。実家はこれからも動かずにあそこに存在するだろう。

でも僕は、何となくあそこから抜け出たように思える。

電車は綾瀬駅を過ぎ、晴れた空を隠して地下鉄線内に入っていく。

中身を折りたたんで戻したグレーの封筒の、何も書かれていない表紙を眺めた。あのとき感じ

ていたようなビリビリした感触は、もう手に伝わってこない。諦めのような、時が過ぎて意味のうすれた安心感があるだけだ。

近ごろでは、「ふつう」なんて、拘る意味のないくらいに広いものだと思うようになった。どんなまなざしで世界を見ていようが、変だと気取られない最低限を抑えるならば、それは問題ない範囲だ、と。

僕に遺書のような手紙を残して消えてしまった青柳だけでなく、いまは、あの頃僕の周りにいたひとたちはみんないない。

きつとこの手紙も、いつしか僕は何気なくごみ箱に入れてしまうだろう。

過去のじぶんを持ち続けてはいられないことに、うつすら気付きはじめていた。

入江にて

山川夜高

兄が帰ってきた日は特別おだやかで風いでいた。晴れた日、妹が庭で洗濯物を干していると、白い軽トラックに乗った兄が知らせもなく帰ってきた。車を停めて降りた兄が、葬儀で着るような礼服の黒いスーツを着込んでいたので驚いた。かつての葬儀のときは兄もまだ学生だったから、スーツではなく黒い学生服を来て、お堂に正座したのを思い出した。

トラックの荷台から魚の入ったクーラーボックスと野菜と生活用品を下ろしたが、まだ一つブルーシートにくるまれた大きな荷物が残っていた。長さ二メートル程の細長い丸太のような大きさで、妹が生魚を冷蔵庫に仕舞いに行っている間に、ブルーシートは解かれていた。台所から戻ってくると、車の脇に立つ兄の隣に男がひとり立っていた。ずぶ濡れで表情のない知らない人物だった。

けさ海で拾ったと兄は言った。水面に浮かんでいるその男を兄の乗っていた漁船が拾い上げ、発見者である兄が引き取って連れてきた。見つけたときにはもう事切れていた。おれが見つけたからしょうがなかった、日頃言葉少なな兄がぼつりと付け足したのを妹は聞いた。

海面に浮かんでいたという水死体は、自分の力で立つて歩いた。色あせたような白いシャツに蒼白い肌をして、頭のとつぺんからつま先までぐつしよりと水に濡れている。でも死んでいると兄は言った。動きはすれど、何もしない。時間が経てば溶けてしまいうらしい。それまで家に置いておくと言った。しばらくこの家で飼っておくと。

家には上げられないと妹は反じた。だって死んでいるのだ。それに濡れている。兄は、それなら縁側か風呂場に置こうと提案した。妹は風呂場にも上げたくなかったが、かと言って外に置いておいても仕方がない。だから縁側に座らせて、日中庭に出しておくならいいと折り合った。作業は水死体を庭から縁側へ連れていくところから始まった。兄も妹も水死体に触れようとはしなかった。水死体は思いのほか従順で、かんまんな動きではあるが、呼べば兄妹についてきた。はだしている水死体を家にそのまま上げるのはためらわれたので、兄は死体の足を拭く雑巾を取りに家の中へ入っていき、妹と水死体が残された。

妹は小柄な方で、水死体は背が高い。顔を盗み見ると、生前からなのか死んだせいなのか分からないが、目鼻立ちはとて薄く印象のない容貌だった。表情は全くない。何をしていても無表情だった。

不意に目を伏せた死者と目が合い、妹はどきつとして目を逸らした。一瞬見えた死者の目は真っ暗で、深く底の知れない濁つてよどんだ色をしていた。

死者はあらゆる風景を一応眺めていたらしい。あたりを眺め、聞こえていたが、物を考えてはいなかった。ぼうつとあたりを見ている死者を誘導して雑巾を踏ませた。けれども足を拭いたところで、廊下を歩けば死者はまた足元を水でびしょびしょにした。待つようにと命じると死者はそこで足を止めた。命令は通じるようだった。

昼時、妹が野菜炒めを作り、廊下に面した和室に座って兄妹は昼食を取った。兄はたまにしか帰ってこないが、面と向かって会えるときでも、兄妹はあまり会話を交わさない。水死体は縁側において、家の庭やその向こうに見える海を眺めているようだった。三月の午後はおだやかで何ひとつ起こらない。開け広げた戸の向こうから潮風がかすかに吹き込んでくる。

じきに兄は畳に寝転がって午睡した。妹は食器の片付けがてら、邪魔にならないように部屋を出ようとして、しかし縁側に水死体を残しているのを思い出した。死者を一人にしてはいけないのかも知れない。人を襲いは、まさか、しないだろうけど、それでなくても行動が読めない。死んでいる彼は妹に背を向けて、生きた人間には興味がないというように、ただひたすらに海を眺めているようだった。兄の寝息が聞こえてきた。食器の片付けと麦茶を取りに台所へ向かった。その家は一本の長い廊下で玄関から奥の間までつながっていて、庭に面した廊下を縁側にしている。

使っていないガラスのコップを戸棚から引つ張りだして麦茶を注いだ。妹自身の分と合わせて

二杯の麦茶を廊下を持つていった。廊下に戻ると板張りの床には水死体から浸み出した水がじつとり広がっていた。あとで雑巾がけをしようと考えながら、雑巾がけをするために彼を上手くどかせるだろうかと心配はあつたけれど、妹は彼に麦茶のグラスを差し出して様子を見た。彼ははじめ麦茶にも妹にも気付いていないようだった。

あの、と妹は呼びかける。「お茶いりませんか」

死者は答えなかった。返事はないが、かんまんに妹のことをふり返り見た。妹は目を逸らした。まだ死者を正視できないでいた。

まるでお供え物みたいに差し出された麦茶に死者は手をつけなかった。死者におそれを抱いてはいたが、妹は辛抱して彼の傍にいてみることを努めた。長い午後の時間に妹は退屈していたし、おそれはしていたが興味はあつた。

「あなたの名前は」と妹は訊いた。返答はもちろんない。死者は海を眺めている。洗濯物が日差しを浴びてやわらかそうに見える。

庭はひらけていて海を臨めるが、砂利ばかりできれいな花もない。勝手口や納戸の脇に小さなサボテンを飾っている。防砂林には満たないが、庭の向こうには緑が茂り、けもの道を下つていくと砂浜まで歩いて行ける。海岸にはときおり何か打ち上げられている。家から西の方にまっすぐ行くと、波止場が伸びているのが見える。あちら側が漁業の中心地であり、この家は町はず

れに建っている。

兄は着ていたスーツを脱いで、シャツに短パンと、楽な格好で眠っていた。三月の日中とはいえ風が吹き込めば涼しすぎる。妹は兄にタオルケットを持ってきた。日焼けした兄の姿は帰宅する度にやつれを重ねているように見えた。妹は兄の話が聞きたかった。仕事のことや死者を拾ったいきさつについて。でも兄も死者も家の中で黙りこんでいる。妹は洗濯物を取り込んだ。兄の衣類をたたんで仕舞った。

夜分、夕食を取っているとき、兄はまた明日から仕事に出て行くかと告げた。兄妹が食卓にいる間、死者は雨戸の内側に立たせていた。廊下が死者の定位置になりそうだった。あれを家に置いておくと兄は言った。いつまでもつか分からないけど家で飼っておく、と。次はいつ帰るのかと妹は訊いたが、兄は分からないと言答えた。遠くなりそうだと妹は思った。死体は兄が帰るまで傷まずにもつのか。あれは喋ったりするのだろうか。兄は魚のあらを細かく刻んで死者に与えた。死者は若干の興味を示したが、口元まで魚を持っていつても食べることはしなかった。食べ物是要らないらしい。びしょ濡れになった床を見て、こいつはときどき動かさないと駄目だなど兄が呟いた。向かい合う兄と水死体は同じぐらいの年齢に見えた。漁師の兄は日に焼けて、水死体は蒼白だった。妹は死者にあれこれ試す兄の様子を眺めていた。

翌朝兄妹は早起きして、兄が身支度する間に妹は兄の弁当を作った。車に乗る兄を見送りに出

ると、兄は妹の頭に手をおいて、しかし別れの一言も言わなかった。彼らはお喋りを交わして絆を築いた兄妹ではなかった。少なくとも兄はそういうことをしなかったし、妹もそれに習った。

妹は洗濯物を回した。死者は一晚中廊下にたたずんでいて、眠りをとった様子はなかった。「おはよう」と妹は声をかけた。洗濯物を出すのに邪魔なので、妹は死者を一步どかせた。縁側のガラス戸を開けていると、死者はいつの間にか背後について来ていた。あたりをうろつき回りはせず、洗濯物を見ていたり、じつとその場にうつむいていたり、向こうの海を眺めていた。洗濯日和で風もなくおだやかな陽気だった。いつでもそうだったと妹は知っていた。妹は彼のための雑巾を洗って干した。少なくとも兄が帰ってくるまでこの家で飼うつもりなのだから。

水死体と一昼夜を過ごし、彼が無害そうであると、妹は判断した。過度に接すること、触れること、同じ食器やタオルを使うことは避けたいが、妹と死者の隔たりはその程度なのかもしれない。死者は常にずぶ濡れだが、汚れそうな様子はないので着替えの必要もなさそうだった。

妹は死者を連れて家の周りを歩きまわった。手持ち無沙汰だったのだ。これがサポテン、これが鉢植えと、そこにあるものを指さして子供に教えるみたいに語った。死者は頷きもしなかったが、おとなしく言葉を聞いた。戻るよと妹が言えば家の中について来た。縁側に彼を留まらせて、風呂桶に水を張って彼の足元に持つていった。足を水に浸かせてから、海水の方がよかったのではないかと思ひ直したが、彼が滴らせているものが海水なのか真水なのかも知らないし、彼は

彼で別段変化も思うところもなさそうだった。

時間ばかりがありあまる日々だった。妹は時間をつぶすために家の掃除を日課にしていた。たんすの上を雑巾で拭き、畳を掃いて、植物に水をやる。生きているもの、生き物ではないものの世話をするのは慣れていた。ならば死んでいるものの世話も果たせるのだろうか。

妹は死者のことを何も知らない。死者はどうやら、生者をおびやかさない。答えがなくても妹は死者に近づくことにした。時間だけならあまるほどあった。妹は死者の隣に座り、海を見つめる彼を眺めた。はだしの爪がいやに白いのが印象に残った。死んでいるのだ。半開きの口が力ない。生きていたら根ほり葉ほり尋ねていたのだろうと思つた。彼は死んでいて答えない。彼の時間はもう止まっている。彼の人生は終わっている。

「でも、名前は聞いてみたいな」

なあというか、ですと言うべきか、迷つた末に妹の言葉は脱力した独り言のような語尾になつた。答えない人に話しかけるのは独り言も同然だし、留守にしがちの兄をもつたためか独り言は多い方だった。それに、ここには妹と彼しかいない。年長者である彼に対して、やはりですますの方がよかつただろうか。

妹は兄の荷物のなかから彼の遺品を探そうとした。それらしいかばんの一つも見つからなかつた。身の回りの物は揚がらなかつたか、はじめから持っていなかつたのかもしれない。しかし自

分が身元を知ったとして、どうするとうののだろうか。彼の生まれや名前を知ったところで、ここにいる彼は死んでいる。どうもしてやれないのだと妹は悟った。

溺れたのだろうか。船が沈んだのだろうか。彼は自殺者のような気がした。身投げしてここに流れ着いたのだと想像するのが一番似合った。

縁側に戻ると彼は変わらない姿勢で座っていた。動くなど言いつければ一日中微動だにしなそうだ。でも全く動かないでいて、蠅がたかつたら困ると考えた。うじが湧いたら飼うことはできない。そのときはまた海に沈めたほうがいいだろうか。

海は凪いでいる。彼にも過去があるということを知っている。

「水死さん」、失礼か。

「名無しのごんべえ」、全然似合わない。

名前のことは切り上げて妹は食事にした。妹がいない間、死者は廊下のどこかに座り込んでいるらしい。入っていい部屋、いけない部屋は既に教えこんでいた。畳の部屋は入ってはいけない。台所と玄関も入らない。風呂場、手洗い場もあり入れない。結局、廊下の奥のほうになる。だいたい縁側のあたりである。じきにタオルかマットを敷こうと妹は考えた。

長い間、ほとんどの日々を妹は一人で過ごしてきた。廊下に彼という視線があるのは、ときどき妹を不慣れな気分させた。彼は見ている。雨戸を閉ざすと海が見えないので、家の中の物を

見て過ごしている。彼は見ているだけで、きつと考えてはいない。真つ暗になった家の中でも、目も瞑らずにたたずんでいる。暗闇の中から蒼白い姿がかすかに浮かぶことがある。妹が彼に対して何か気にするようなことはないのだ。

消灯する前に声をかけた。

「おやすみなさい」

返事はないし、水死体はきつと眠らない。

布団に入って彼の名前をあてどなく考えていると寝付けなくなった。彼のための縁側の足拭きのことを連想して、彼が風呂にはいる必要性、虫がつかないように清潔に保たなければならぬと考えた。でも彼は死んでいる。そのために自分が彼の身体を洗わなければならないと思い、妹はひどく不安になった。死者のずぶ濡れの白い素肌を触れようという気にはなれなかった。そういう点において、たとえ彼が人のように自立して過ごしているとしても、生活と死者の決定的な隔たりを悟った。妹は死者をおそれていた。たとえこれから飼うと決めたとしても。

翌朝、ヨドミという素敵な名前を思いついた。失礼な聞こえ方はしないし、よどんだ目という由来もあつて、妹は呼び名をなかなか気に入った。早速廊下にいた彼に「おはよう、ヨドミさん」と声をかけた。名前を与えられても死者はやはり何とも思わないようだった。

「雨戸を開けるよ。洗濯物が終わったら散歩に行かない？ ちよつと待つてね、サンダルを探してあげる。はだしのまま出歩いたらガラスを踏んで怪我するかもしれない」

矢継ぎ早に声をかけたら意味を聞き取れないだろうか。そう分かっている妹はまくし立てた。「まだここについて待つていてね。わたしはご飯を食べて着替えて髪を結んで、洗濯物を回して外に出さなきゃ」

ヨドミ氏は相槌も打たなかった。妹はとても満足した。朝の仕事を片付けて、使われていないサンダルを下駄箱から引つ張り出した。外は晴れ、おだやかなそよ風が海の方から吹いてくる。

生垣の間のけもの道を下つて海の方へ出た。家は丘の上にあつて、少し下ればすぐに砂浜にたどり着く。浜は小さな入江である。魚が打ち上げられていて、二羽のガラスが目玉を突いていた。さざ波が浅瀬の砂をかき混ぜて、巻き上げながら砂浜に押し寄せた。波打際の水は砂が混じつて濁っている。沖に出ればけつこうきれいだと言つていた。波打際が濁つていても、晴れた日には海は青く、沖では海底が見えることもあつた。ヨドミ氏は今までで一番強い反応を示し、海をじつと凝視していた。

家に一人でいても仕方のないとき、妹は浜に足を運んだ。波の寄せたり引いたりするのを見ているのは好きだった。ときどき魚影を目撃できた。浜に流れ着いたものを探して歩くのも楽しみだった。

ヨドミ氏は茫然と遠くの方を眺めていた。水平線はもやがかかって白んでいた。何を見ているのか知りたくて、妹は死者が見ているさまを見ていた。海は凧いでいた。死んだ魚のほかには変わったものは上がっていなかった。魚の死体に近づくと、カラスが鳴いて、ほんの少し遠くに飛び立ち、また着地してこちらを伺った。カラスにヨドミ氏が突つかれるのを妹は避けようと決めた。飼うにあたって、食い荒らされて傷がつくのは絶対に避けたかった。カラスはヨドミ氏を気にしているだろうか。ずっと同じ場所に立ち尽くしていたら、動かないエサだと思われて襲われるかもしれない。妹はヨドミ氏を歩かせた。それから、いつも上空を飛んでいるトンビにも気をつけなければならないと思った。

海外線に沿って歩いた。目を離すとヨドミ氏はふらふらと遠くに行ってしまうそうである。見失わないこと、動物から遠ざけることを守らなければならないと、これからの生活のことを考えた。ずっと昔、妹は覚えていないのだが、兄が犬を飼っていた。仔山羊ぐらいの大きさの、茶色く鼻の長い犬だった。その犬が死んで、今度は猫が家に寄りついた。その猫もいつしか現れなくなり、今では動物は家の隅に巣を張っている蜘蛛ぐらいしかいなかった。

昨日のうちは、はなから、水死体はすぐ死ぬものだと考えていた。死体が犬や猫ほどに長く生きるとは思えない。でも名前をつけて散歩させてみると、少なくとも縁日の金魚よりは長持ちしそうだと思いはじめた。妹にとって背の高いヨドミ氏を連れて歩くのは気分がよかった。鳥に気

をつけながらあたりを歩いて、家に戻ったのは昼過ぎだった。

食料品を買いに行こうとして、留守中のヨドミ氏の対処に悩んだ。出掛けるたびに雨戸を引いて閉じ込めるなんて大げさである。動かないようにと言いつければきつとそれを守るので、一時的に風呂場に閉じ込めた。外鍵はかけられないが仕方がない。なるべく急いで、しかも今後死者を置いて出歩く必要の少ないように、いつもより多く買い込んだ。帰宅するとヨドミ氏は風呂場の床に座り込み、浴槽に残っていた水を海を見ていたときのように凝視して待っていた。縁側に連れて行って庭から海を見せ、おとなしくしている間に風呂場の掃除をした。ずぶ濡れの死者が滲ませる何だか知れない液体が排水口に流れていった。風呂の掃除は苦ではなかった。もしも風呂に入れておいたら水槽で飼っているみたいだと思った。

縁側に座っているヨドミ氏に、ゼリーやヨーグルトや寒天やアイスクリームを少量ずつすくって取り分けて、彼が食すかどうかを試した。スプーンは使い捨てのプラスチック製のを買ってきた。死者に自分達の使う食器を使わせることは出来ない。ときおりこうやって、潔癖感により、妹はヨドミ氏の死を決定的に自覚する。ヨドミ氏はヨーグルトには見向きもせず、バナライースも興味なく、ゼリーと寒天は口をわずかに開けたが飲み込まず、口から破片がこぼれて落ちた。半開きの口の中は肌の色よりも血色が悪く、湿って蒼白な舌が伺えた。妹はかつて葬儀で見た白ユリの肉厚な花びらを思い出した。なめらかでいて血が通っていない点で、生花は遺体を連想さ

せた。その口の中に宛てがわれたスプーンは、死者の内部に深入りしたために、もう生きている者が使うことはできない。生々しく、しかし死んでいる彼の唇が、寒天の破片を拒絶して吐き出すのを、妹は目を背けられずにまざまざと目撃した。しつとりと濡れた温度のない唇、それは妹に牙を剥くことは決してないのに、決定的な畏怖の対象として目に強く焼きついた。

死者の腿の上に落ちた寒天をスプーンですくって流しに捨てた。彼の素肌にも触れたことはないが、不用意に触らないほうがいいと判断した。水浸しで真っ白いからには、生きた人間よりずっと寒天みたいに脆そうで、触れたら傷んでしまう気がした。

一方でヨドミ氏自身は何かに触れようとして手を伸ばすことをしなかった。ヨドミ氏は縁側に黙って座っていて、ときどき庭や海の方へ歩いた。歩いては立ち止まりその場にたたずんだ。花を摘んだり石を拾ったり、そういう動きをしたことはなかった。ただあたりを眺めていた。それも首や視線をきよろぎよろ動かしたりはせず、海や水たまりや足元を何も言わずに見つめていた。彼の興味は極端に狭かった。食べ物や差し出しもたいがい気付きもしないように見えた。

散歩の代わりに家の中を案内した。座敷の部屋には立ち入らせない。ふすまを開いて中を見せるだけに留めた。彼も彼で家の中にいて退屈しているのではないかと思つた。

彼の足音はとても小さい。ひたひたと廊下を歩くと水のはねる音がした。こまめに拭かなければ水浸しになり板が腐つてしまふだろう。彼が面白く感じるとは思えないが、家の中を歩きまわ

り、納屋の方もぐるりと見せた。そしてまた庭を一周して、海岸に足を運んだ。日が傾いて潮が満ち始め、南向きの海に夕日が反射してちらちらと眩しかった。目を細めた妹に対して、彼は少しも眩しがる様子もなく、ただ遠くの海を見つめていた。結局どんなものよりも海が一番の関心事らしい。「きれいだね」と妹は話しかけた。死者は会話を答えなかった。

生前の彼も海が好きだったのだろうと妹は察した。それでなくてもこの沖合で彼が死んだのは間違いなかった。死者は自分の沈んだ場所をじつと見つめているのかもしれないなかった。

ふいに、ヨドミ氏がまた沈んでしまう気がしてならなくなった。「戻ろう」と妹はせがんだ。ヨドミ氏はかんまんな動作で目を伏せ、妹をちらりと見るようにしてのろのろと家へ帰った。放っておいたらヨドミ氏はまたあの海へ還るのだろうと、そう思えてならなかった。

夜、廊下の拭き掃除をして、足ふきマットの上に彼を留まらせる実験をした。板張りの床に直に立つよりもずつと良いだろうと考えた。かつて庭の片隅にあつた犬小屋の様子を思い出していた。あの犬は、犬も猫も、家の外で飼っていたが、室内で飼われる犬猫が用を足すためのマットを連想した。彼は妹が命じたことを聞き入れてじつとしていた。意味が伝わっていなくても生活はできるのだろうか。

「ヨドミさんはどこからきたの？」

食べないだろうと思ひながらも夕食の残りを少しすくって彼の口元に宛てがった。夕飯はほと

んど魚だった。海辺の町では魚介に困らない。

「海は好き？」

「魚は見えた？」

「ここの海はきれいな？」

「うちはどう？」

ぶしつけな言葉だと妹は自覚して、なおも語りかけていた。ヨドミ氏は傷つかない。

「本当は何か食べたかったり、やりたいことあるんじゃないかな。ごめんね、わたしが見つけれなくて。お水はいらない？ 水は飲んでもいいんじゃないかな」

コップを口の端にあてて傾けたが、水は唇を伝って肌の上を流れ、死者の喉を通らない。あまりかまわない方がいいのだろうと分かっている世話を焼いてしまう。

垂れた水の落ちる先を追って、妹は目を伏せ、「ごめんね」と零した。死んだ人には不満も希望もないのに、自分が関わっていいのだろうか、そうでなくても目の前の死者は妹にとっては年長者だった。享年三〇にも満たないだろうが、年長者であり、早すぎる死だった。

顔を上げるとヨドミ氏が妹を見つめていた。食器や花壇を眺めていたときのよう、黒々とした目で穴が空くほど見ている。じつと目を合わせていると、見られているうちに自分の身体に穴が空けられていきそうな気がはじめ、自らの無防備さにおそれを抱き、妹はまたも目を反らし

た。彼の口元から首元にかけてを凝視はせず視野に捉えていた。白いシャツが濡れて肌に吸い付き、色のない唇のせいで寒そうに見えた。黙っていたがひしひしと視線を感じていた。あとになつて妹は、彼が自分を観察していたのだと察した。

晴れた日には洗濯物を干した。雨が降らなければ毎日ヨドミ氏と海へ出向いた。彼は茫然と何かを見つめたり興味のある方へ歩いていくだけで、相変わらずの過ごし方をしていた。妹は砂浜に目を凝らし、気に入った貝殻やガラス片を拾い集めるのを楽しみにしていた。そう毎日良い物が見つかることはなかったが、物を拾うことはずっと継続しており、家の引き出しにはかなりの数の拾い物がたまっている。

打ち上げられていた魚はいつの間にかいなくなっていた。食われて骨が残っているわけでもなく、本当にいなくなっていた。また波に流されたらしかった。あるいは誰かが拾っていったのか。「むかしタコが打ち上げられていたことがあつたんだよ」

妹は隣のヨドミ氏に語った。

「まだ生きていたけどそこら中を這ったあとでもう弱つてた。兄が捕まえて家でさばいたところを見たよ。タコの血つて青っぽくて、身体を切られてもずっと動いているんだね」

腕一本になつてもゆれるようにぐねぐねと動いていたのを妹は見た。魚も、さばかれてもなお

生きていたときのように痙攣しているのを知っている。

タコとか、大きなものが流れ着いてきた日は嬉しい。

その日見つけたガラス片は好みの緑色をしていて気に入ったが、まだ角が取れずに尖っていたから、拾わずにそのまま砂浜に残した。ふと海中に目を向けたら、魚の群れが浅瀬に向かってぐるりと回ってくるところだった。

「見て！」と妹は声をかけた。

小魚たちは入江をひるがえってまた外洋に帰った。

ヨドミ氏も魚の群れを見ていた。まばたき一つしないようだった。そういうば目を瞑ったことがあっただろうかと妹は考えた。

見て、と言った自身の声が、叫んだときのように大声になってしまったのが、妹にはひどく気がかりになった。気にすることではないし悔やんでいるわけでもないのだが、ただ自分自身に対する気がかりだけがあとに残った。もちろん誰も、ヨドミ氏にも、妹の声は聞こえていなかった。

繰り返す潮の満ち引きで、砂浜には泡や漂着物が打ち上げられ、波の寄せた跡が幾重かの薄い線になって残されていた。濡れた砂の上の方が足場が固められていて歩きやすい。じきに妹は靴を脱ぎ、はだしになって波打際を歩いた。ふいに大波が寄せて妹の足にかぶり、まだ冷たい水温

に妹は甲高い声を上げた。ヨドミ氏の足も水に触れていた。冷たい水に動じた様子はなく、日夜眺めていた海にやつと足をつけたことへの感慨にふける気配もない。変わった様子がないのを見て妹は一安心した。そして自分が死者と同じ水に浸かっていることに気付いた。あれほど気にかけていた不浄な気はまったく感じなかった。死者は妹に出会う前からこの海の中でとつくに死んでいたし、彼を除いても幾人も、それは人に限らずあらゆるものが、この海に沈んでいるからだろうと、妹は思いを馳せた。

小枝が落ちていた。波に磨かれてすべすべとしていた。妹は小枝を拾い上げ、浜に何かいたずら書きをしようと試みたが、特別書きたいことなどなかったので、棒倒しをするように砂に枝を突き刺した。

「海の中はきれいだった？」

ヨドミ氏は波に浸かるか浸からないかの狭間に立つて海を見ていた。口の端からわずかに水が滴っているのが見えた。彼の足元でその液体は海水と混ざり合った。妹は彼に歩み寄った。水平線の彼方まで限りなく湛えられた水の中では、清浄も不浄もないまぜになり、等しく波に洗われた。遠くに船が静止している。

「沈んだとき、どう思った？ 怖かった？ 忘れ物はあった？ きつと、あったよね。でなぎや、戻ってこないよね」

今や妹の足はすっかりくるぶしまで水に浸かっていた。春の海は天候の暖かさに対してまだ冬の冷たさを残していたが、波の感触は柔らかく丸い。

「独り言なの。返事は、ないけど。本当は言いたいことたくさんあるけど、全部は言えないし、聞いてくれる人もいないし。でも聞いてほしいのかな。自分に言い聞かせて確かめたいのかな。分らない。わたしは変だね」

大きな波が寄せて、死者の足を水で浸した。返す波が砂をさらい、浜に刺した棒を倒した。黙りこんでいてもさざ波の音が絶えずあたりを満たしていた。

「わたし遠くにいてもいつも波の音が聞こえている気がする」
死者は一切沈黙していた。

「苦しかった？」

冷たさに慣れた足で、ざぶざぶと波を立てて、妹は死者に近寄った。いよいよ触れそうだとも思ったが、沈黙する死者の前に、妹は伸ばした手を止めた。死者の傍をすれ違い、はだしのまま砂浜に上がった。足元の小石を拾い上げ、風いだ頃合いを見計らい、兄が得意だった水切りの真似をして投石した。石は一度も跳ねずに沈んだ。沈んだ石を死者は見ていた。続けて二度の投石も失敗した。じきにヨドミ氏にぶつけれなくなった。無防備な背中に思い切り石をぶつけてみたいと思った。石を握りしめたまま、振りかぶっていいよ投げつけようと思った瞬間さえあった。

けれども結局妹は石をぶつけることをしなかつた。それを誰かに褒められたかつた。

浜に透明な塊が落ちていた。両てのひらで抱えられる位のゲル状の丸い塊である。白いコイル状の糸くずのような器官や紅色の点々が透けて見えた。クラゲは、ときどき、集団で浜に流れ着く。乾いて縮んで溶けかけたものや、もはや破片と化したものもあつた。目の前に落ちていたそれはまだ生きていたときの形を残していた。

妹はつま先でクラゲを小突いた。透明でやわらかいばかりで、死んでいるのかも定かではなかつた。ぶつ切りにされてなお動いていたタコと生死の見分けのつかないクラゲは、どちらの方が生きていると言えるのか、いつ死んだことになるのか、妹はしばらく思いを巡らせた。もちろん今は判断はつかないと妹は知っていた。妹は浜にしゃがみこんで、べつたりと打ち上げられている、クラゲだつた塊を眺めた。たとえば打ち上げられてしまったこのクラゲをつまんで海に投げ返したとしても、息を吹き返して再び泳ぎだすことはないだろうと直感した。

隣にヨドミ氏がいた。しゃがみ込みはしなかつたが、死んだクラゲを見下ろしていた。彼の雫が妹の肩に落ちたが、妹は気に留めないふりをした。というよりもいっその一滴によつて踏み切りが付いたとでもいうふうに、反動をつけてぐつと立ち上がり、海面をぎらぎら反射される陽の光をまつすぐ見つめた。妹は空腹を感じた。波音を除いて目に見えるものすべてが黙りこんでいた。

海岸を歩き出した。進むのはいつも漁村と反対の東の方角へだった。

疲れきつてしまいたいと妹は願った。身体にむち打つつもりでとぼとぼ歩いた。そうやって時間を浪費していれば、じきに兄は帰ってくるのだ。

道程を歩きながら、妹は、思いつくままにヨドミ氏に語りかけた。見たものや思ったことを無遠慮に投げかけつづけた。死者が応えることはないと妹はとつくに承知していた。

「でも知っているんだよ」と、その沈黙に対して妹は応じた。「あなたはわたしのこと聞こえてる」それが自力で手に入れた、最初のお守りの言葉だった。

東へ行くと岩場を利用した小さな堤防が海へと伸びている。船着場として使われてはいない。コンクリートの上にはフジツボばかりへばりついている。妹は堤防の先端に立った。海中を覗きこむと白い影がよぎるのが見えた。死者は堤防の半ばあたりで立ち止まっていた。

入江の方へ波が寄せる。寄せる水の流れを横目に見る。自分が静止し、海面は絶えず流れているので、まるで自分の方が動いているような、流されているような錯覚に陥る。船の甲板に立つて流れていく風景を見送っているような気がし始める。不在感に似た酔いだった。自分がここに立っているという事実と、自分が海上で流されているような感覚、実体験と思考がかみ合わずに遠ざかっていくさまを、妹は自覚した。酔いの自覚に妹はかすかな快楽を味わった。いまここにいるということから自由になったような気がした。同時に、実際の世界と思考の内側が永久にか

み合わないでいたら——今は意図して思考の遊離をあそんでいるが、不随意に身体と心が離れつづけたら、身体と思考の重なりが断たれてしまったら、その時はおしまいなのだろうとも察した。おしまいというのは取り返しのかかさだつた。たとえばと妹は思う。今ここでこの海に飛び込んだらおしまいだ。もし溺れ死んだとしても、浮上して岸に戻つたとしても、寒くてずぶ濡れのみじめな身体で海岸を引き返さないといけない。どちらにせよ取り返しがかからないのだ。水死体に交わることに、打ち上げられた魚やクラゲ、それらもまた妹が見たおしまいであることのひとつであった。妹はおしまいの瀬戸際で遊ぶことを覚えた。おしまいの寸前は魅力的だつた。けれど、もおしまいの向こう側を、妹は知らない。知りたくない。地続きの国境線を越えるよりもずっと、彼女の想像が及ばないほど、おしまいは隔てられている。

振り返るとヨドミ氏は足元に目を落としていた。緑がかつた体色に赤い模様が入つたヒトデが堤防の上に落ちていた。妹はつま先で小突き、反応がないのを見て指でつまんでひっくり返した。ヒトデは乾いて固くなつていた。身体の裏側に生えた白い触手はすべて活動を止めていた。

ヨドミ氏にヒトデを差し出した。ヨドミ氏は受け取らなかつた。妹はヒトデを海に捨てた。死体が海底に沈んでいくのを、ヨドミ氏は目で追つた。

暮れなずむ空の端は薄桃色。

家の廊下に二人はいる。水を張った風呂桶に足を浸したヨドミ氏は、黙り込んで外の世界を眺めている。日差しは暖かくそよ風が冷たい。洗濯物は船の帆のように風をはらんでふくらんでいる。妹はうずくまり、水死体の傍らにいる。触れそうなくらい近くにいたが、触れることはしなかった。触れたら戻れなくなると思った。

「ヨドミさん」

うずくまったまま声を掛けた。庭へ開け放たれた縁側の空気は肌寒かった。

あれから、妹は、集めたシーグラスをひっくり返し、本当の気に入りだけを残して、他を海にばらまいた。手元に残ったガラス片は白いのが一つと青いのが二つで、偶然による複雑なひび割れのために、光の加減で真珠層のような虹色が浮かび上がっていた。

彼女はガラス片を握りしめてまどろんでいる。

「ヨドミさん」

ガラスが擦れ合い甲高く鳴った。この鋭利な欠片で人肌を傷つけてしまいたい。

妹の腫れぼったい唇が半開きのまま言葉を探す。声を上げる前からすでに泣き出しそうだった。寝そべりながら身に降りかかる感傷とあそんでいた。結局、自分自身を除いて、遊び相手は現れなかった。

「ヨドミさん」

三たび声をかけた。

「どうして死んでしまったの」

けれど、死んでいなかったら、妹とその男は出会わなかった。

けれど、と妹は声を上げる。覚えてたの感傷を振りかざして。感情がせめぎ合っているふりをしていた。道は、まったく一本道だったのに。

妹は彼の膝に頭をあずけて眠りたかった。それどころか、欲しかったのは、ただ一度の相槌だった。

ガルシア

田中バイオ

ガルシアはいつもおもしろい話をしてくれた。きのう間違つてナイフで指を切つて出た血がパンケーキに垂れて食べてみたらストロベリージャムの味がしたとか、学校へ行く途中の路地を普段と逆の方向へ曲がると空と地面が逆さになった町へ出るとか、猫に話しかけられて真剣に議論したら負かされてしまい涙していたときに慰めてくれたのが今の妻だとか。ガルシアは木に登つていて僕が木の前を通ると必ず「俺は上、お前は下。かわいそうなやつだな。仕方ない、とつておきの話をしよろう」と片目をつむつて話を始めた。話をしている間はずつと片目を閉じていた。一度訊いたことがある。どうして右目を閉じているのか。ガルシアはこんなことを言つた。

左目で外を見る。右目は中を見る。俺の頭の中だ。中を見ると目玉がひっくりかえる。お前に目玉の裏側をみせると、お前はびっくりするだろう。これは愛だ。「愛だ」と述べるときのガルシアは実に満足そうだった。

ガルシアが死んだのはつい最近のことだ。僕がいつもの木の前を通つたとき、ガルシアの姿は

なかった。変だな、と思い、周りの草むらを探した。頭から血を流しうつぶせになったガルシアがいた。あわてて近寄るとガルシアは息絶えたまま動いた。いや、よく見るとガルシアの体の下に無数の蟻がいて、大勢で大きなガルシアを運んでいた。そのまま崖から捨てられたガルシアは、深い谷の底に消えていった。僕は右目をつむり、ガルシアが倒れていた草むらに戻った。ガルシアが流した血は乾いてチーズのように固まっていた。僕は閉じた右目で「愛だよ」と満足そうに語るガルシアを見ながら、血のかたまりを口いっぱいにはおぼった。予想していた通り、その味はストロベリージャムだった。ガルシアの血が僕の胃の中でハムスターのような小動物に変わっていくのを感じた。僕は今日もお腹をなでながら、彼のいた木に登って彼の話を思い出している。

スイマーズ 佐藤美有
山川夜高 <http://libsy.web.fc2.com/>
ゲスト 田中バイオ
表紙装画 上原悠里

VANITAS

スイマー Vol.3

2014年11月24日 初版発行

発行者 スイマーズ
<http://minasoco.jimdo.com/>
swimmers.info@gmail.com

印刷 コミックモール（文伸印刷株式会社）

乱丁・落丁本はお取り返しますのでお早めにご連絡ください
Copyright(c) 2014 SWIMMERS All Rights Reserved.